

『蜜柑』

やつと隧道トンネルを出たと思う——その時その蕭索しょうさくとした踏切りの柵さくの向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天曇りに押しすくめられたかと思う程、揃そろって背が低かった。そうして又この町はずれの陰惨いんさんたる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙あげるが早いか、いたいけな喉のどを高く反らせて、何とも意味の分らない喊声かんせいを一生懸命ほんげんに迸ほとばしらせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢いきおいよく左右に振ったと思うと、忽たちまち心を躍おどらすばかり暖な日の色に染まっている蜜柑が凡およそ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。私は思わず息を呑のんだ。そうして刹那せつなに一切を了解した。小娘は、恐おそらくはこれから奉公先へ赴おもむこうとしている小娘は、その懐ふところに蔵かくれていた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落らんらくする鮮あざやかな蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬またたく暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得体の知れない朗ほがらかな心もちが湧わき上って来るのを意識した。私は昂然こうぜんと頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、相不変あいかわらず鞞びだらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱かかえた手に、しっかりと三等切符を握にぎっている。……………

私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生わすかを僅わずかに忘れる事が出来たのである。